

「漢方医学古書と道具」



本学は、「学問による人間形成」を学足として、昭和 40 年に創設されました。昭和 48 年に開設された薬学部は、薬剤師養成課程として 6 年制の薬学科、化粧品や食品、医薬品の研究開発のスペシャリストを育成する 4 年制の薬科学科、管理栄養士養成課程としての医療栄養学科があります。

現代の医療、薬学、栄養学を学習する上で、歴史的考察の資料として日本古来の漢方や医学書に触れ、先人の叡智を学ぶことも人間形成の上で重要なことです。

図書館では、建学の精神に基づく学士力・人間力の涵養に資することを目的として和本、薬籠など古資料を蒐集・保存・公開しています。

解体新書(かいたいしんしょ)

西洋の解剖学書を翻訳・刊行した日本最初の本格的な西洋医学の翻訳書であり、本文四冊、別に序文と図譜を掲げた一冊とからなる。翻訳事業の中心になったのは前野良沢(りょうたく)と杉田玄白(げんぱく)で、中川淳庵(じゅんあん)・桂川甫周(かつらがわほしゅう)ら多くの人々が協力した。1771 年(明和 8)から 4 年間にわたる苦心・努力のさまは、杉田玄白の回想録『蘭学事始(らんがくことはじめ)』のなかに詳細かつ新鮮に記されている。

原書はドイツ、ダンチヒのクルムス Johann Adam Kulmus が著した『解剖図譜』Anatomische Tabellen のオランダ語訳書。クルムスの原書が出版されたのは 1722 年であるが、杉田玄白らが使ったのは 1734 年に出版された、ディクテン Gerardus Dichten がオランダ語訳した『Ontleedkundige Tafelen』であり、その第 2 版であった。これは小型本で、その内容は簡単な本文とやや詳しい注記からなり、別に 27 枚の図譜を付し、やや初学者向けの医学書であった。これを底本としてなった『解体新書』は全文漢文で記され、原書にある本文だけを訳出し、その注記には全然手を触れていない。

原書の図譜は銅版であるが、『解体新書』の図譜は木版である。付図の数は『解体新書』のほうが原書よりやや多いが、それはほかの西洋解剖書から引用したものである。図譜を掲げた冊子は、ほかに吉雄耕牛(よしおこうぎゅう)の序文と杉田玄白の自序、および凡例、図譜は小田野直武(なおたけ)が描いている。

参考文献 (1973)「万有百科大事典」14 医学 小学館

本学所蔵の『序図』は、序に「安永二年癸巳之春三月 阿蘭譯官西肥吉雄永章撰」とあり、序末次頁に「甲午孟春東江源鱗書」とある。安永 2 年癸巳(1773 年)に、オランダ語通詞(幕府公式通訳)の吉雄耕牛(諱(いみな)は永章)の序文を、甲午(安永 3 年=1774 年)に書家、沢田東江(東江源鱗)が書いている。巻末には、「東羽秋田藩小田野直武」とあり、平賀源内から洋画を学んだとされる画家、秋田藩士小田野直武が図を描いていることがわかる。



城西大学水田記念図書館

Josai University Mizuta Memorial Library

傷寒論(しょうかんろん)

中国の医学書で漢方医学の原典ともいわれており、後漢(ごかん)(25～220)の時代の長沙(ちょうさ)の太守、張仲景(ちょうちゅうけい)によって著されたといわれる。

腸チフス様の急性悪性感染症(傷寒)と、かぜ症候群様の急性良性感染症(中風)とを相対比させながら、その初発から終末までの、時間の経過とともに変化していく病態を、大局的に把握しかつ分類し、その分類に応じての治療の原則や、その原則に従っての治療処方とその応用の仕方を、きわめて簡明直截(ちよくせつ)に述べた経験医学書である。したがって、疾病そのものに対する見方や処置の仕方を教えたものであり、そうした内容の書は他に類をみない。本書が他の多くの医書に優れるばかりでなく、2000年後の現代に至ってもその真価が失われることなく、濟生の道に活用されている理由はそうした点にあるといえる。現代医学の新薬の命が、多くは10年前後であるのを見るとき、『傷寒論』の所論と処方とが、いかに価値あるものであるかが明らかになる。

『傷寒論』は張仲景の著述とされるが確証はない。もとの形は『傷寒雜病論』で、うち「雜病論」が『金匱要略(きんぎょうりやく)』に分けられたとされる。その文体が『易経』に似ている点から発生はかなり古いと推測されるが、確証はなく、本書成立の経緯に関しては、今後の埋蔵文化の発掘などに期待するしかない。

参考文献 日本大百科全書(ニッポニカ), ジャパンナレッジ (オンラインデータベース), 入手先<<http://na.jkn21.com>>, (参照 2010-09-27)

貝原養生訓(かいばらようじょうくん)

貝原益軒(かいばらえきけん, 1630～1714)の著になる養生教訓書。全八巻付録一卷四冊。付録は杉本義篤(すぎもとよしあつ)著。正徳3(1713)年刊。享保17(1732)年・文化4(1807)年等の刊行ないしは序刊のものもある。広く一般庶民を対象として変体仮名を用いて記された啓蒙的養生書で、巻一～二は総論、次いで飲食・飲茶・煙草・慎色欲・五官・二便・洗浴・慎病・扱医・用薬・養老・育幼・針法・灸法の各項目について要領よくかつ具体的に解説されており、江戸時代を代表する養生書として有名。『益軒全集』『日本教育文庫』『日本哲学思想全書』ほかに活字収録。また岩波文庫本の翻訳字や、中公文庫・講談社学術文庫の翻訳本などがある。

参考文献 小曾戸洋著(1999)「日本漢方典籍辞典」大修館書店

本学では、天保5年(1834年)のものと万延元年(1860年)のもの2セットを所蔵している。

薬匙(やくし)

現在では薬さじと呼ばれていて、固形のくすり(生薬や散剤、顆粒剤)を量るために用いられる。木製、竹製、金属製などがあり大きさ、かたちも対象となる薬の量、容器、使いやすさに応じていろいろなものが工夫されている。金属を腐食させる薬には金属製のものは用いることはできない。

薬缶(やかん)

現在でも使われている「やかん」は、薬(漢方薬)を煎じるために使用されていた薬罐(やくくわん)の発音が変化したもので、“薬缶”の字が当てられた。銅製などが多く用いられたため、現在でも日本薬局方でエキス剤、流エキス剤には、容器に由来する有害な重金属を試験する「重金属試験法」が規定されている。

薬籠(やくろう)

「根本皮などを薬研(やげん)で細かい粉にした薬や、煎(せん)じ薬を入れた薬箱。堆朱(ついしゅ)製の豪華なものから、簡単な引き出し箱にしたもの、あるいは重ね箱にした塗り箱などがある。いずれも漢方医が病人の家へ診察に行くとき従僕に持参させた。箱の中には数十種の薬を入れておくものとされていた。江戸時代末に印籠(いんろう)の一種に薬籠蓋(ぶた)といつかぶせ蓋があるが、これは室町時代の薬籠のおもかげを示すものであろう。

参考文献 日本大百科全書(ニッポニカ), ジャパンナレッジ (オンラインデータベース), 入手先<<http://na.jkn21.com>>, (参照 2010-09-24)

道中薬入れ(どうちゅうくすりいれ)

江戸時代に用いられた携帯用の薬入れ。薬の携帯には巾着や印籠なども利用された。展示のものは竹製で薬の紛失や変質を防ぐ構造になっている。



城西大学水田記念図書館

〒350-0295

<http://libopac.josai.ac.jp/>

埼玉県坂戸市けやき台1-1

TEL 049-271-7736